

かということが、この解釈では見落とされてしまう。スペクトラムという概念は、異常と正常を分けないと謳いつつ、段階的に人々を障害の概念で分けている点に注意しなければならない。異常と正常の間を消失させることは、一見すると非常に良いアイデアのように思えるが、日本の医療・福祉の枠組みでは、当人が一般的な人とは質的に異なる体験をしていなければならないので、結局、最終的にはどこかの時点で人々を分けなければならない。そもそも、自閉症におけるコミュニケーションの困難は質的障害と言われるように「多少空気が読めないこととは質的に異なる体験である」という最も基本的な自閉症への理解も十分になされているかどうか疑問が残るところである。その中で「空気が読めない」ということの延長上に自閉症があるとみなされてしまうことによって、本当の困難性が理解されず、必要な人に適切な支援がなされなくなってしまうことは避けなければならないだろう。

また、拡大された自閉症スペクトラムの解釈を用いることで、自閉症に対するスティグマをかえって強める恐れがあるという考えもある。コミュニケーションが下手なことを逸脱とみなす日本の文化と拡大した自閉症スペクトラム概念が結びつくことによって、コミュニケーションが下手なことは障害である、とみなされるようになる。今まではコミュニケーションが下手という程度の理解であったものが、障害であるというスティグマを突きつけることになってしまうということである。

おわりに

精神保健分野において、ダイバーシティがもたらす「副作用」についても留意しなければならない。これは一般の人のみならず専門家においても、慎重に取り扱うべき問題である。概念が広がったから、正常と異常は明確に区分できるものではないから、といって安易に「あなたには障害がある（かもしれない）」と言うべきではないだろう。大事なのは、本当に必要な人に適切な支援をできるだけ早く届けることなのだ。ダイバーシティ化と支援の充実を両立させていくためには、人々の十分な理解が欠かせない。理解のない普及は、ともすれば暴力になりかねないことを忘れてはならない。

参考文献

本田秀夫、「自閉症スペクトラムがよくわかる本」講談社、2015

宮本信也「自閉症スペクトラムの本」主婦の友社、2015

Wing L., "The autistic spectrum." Lancet, 350, 1761-1766, 1997

形、遊び、学生の世界の多様性

東 義 也（子ども学科教授）

1 形の世界の多様性

「多様性」と聞いて私の頭にまず浮かぶのは、フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）の恩物を巡る思想である。恩物とは聞き慣れない言葉である。元はドイツ語の

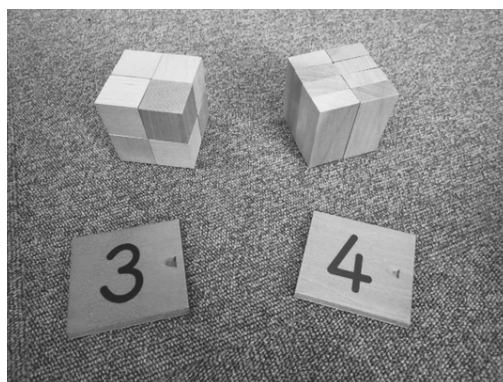
Gabe（英語では gift）であり、これを明治時代の人（関信三）が「恩物」と訳した。今でいう「玩具（遊具）」「積木」といいいいだろう。

フレーベルはいくつもの恩物を考案した。最初に登場する第一恩物は六色の毛糸玉である。毛糸玉だから球体（ball）の形をしている。これは中心点から表面まで、どこも半径が一定な最も単純な法則性をもった形といいいいだろう。つまり、どこから見ても、どう動かしても、いつも同じ姿として見える。ということで、球体は形の中で最も調和のとれた、統一された形であると言えないだろうか。私はこれを「形の中の形」と呼んでいる。

フレーベルは、この第一恩物から始めて、形の世界の多様性をこの恩物によって表現しようとした。第三恩物は8つの立方体、第四恩物は8つの直方体、第五恩物は立方体と三角柱の積木といった具合である。そして、形の世界は無限に広がって展開していく。まさに多様な世界を表現していくのである（図1、2を参照）。



（図1）



（図2）

この最も調和のとれた球体から、様々な形、複雑な形に発展していく有様は、自然の摂理に対応していると考えられる。例えば一粒の小さい種は球体に近い形である。それが土の中で育ち始めると、根を出し、芽が生え、葉を茂らせ、姿形をどんどん変えていく。ある種は大木にまでなるだろう。また、人間の生命もこれに対応している。最初の受精卵は0.1ミリの球体である。それから細胞分裂を繰り返しながら、人の形になって誕生する。その後も様々な刺激を受け体験を経ながら、人は成長し、生涯発達していくのである。恩物の繰り広げる形の多様性は、自然の有様や私たちの存在、生き方についても暗示しているのではないだろうか。

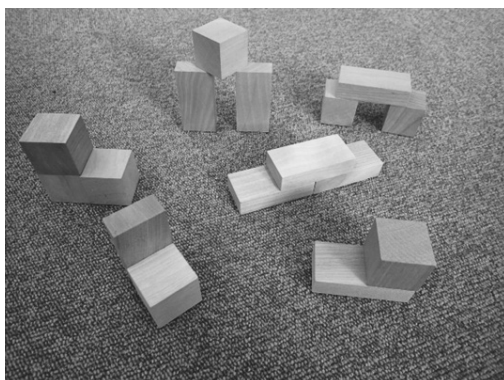
2 子どもの遊びの多様性

フレーベルは、自身が考案した恩物を子どもに与えた。子どもが恩物に自ら働きかけて遊ぶことによって、形の世界の多様性を直感し、同時にまた、自然や生命の摂理についても学習することを目指したのである。つまり、生まれてきたこの世界が変化に富み、豊かで祝福に満ちた素晴らしい世界であることを、子どもが遊びの中で自ら気づき学ぶことを目指したのである。

実際に子ども自身の遊びも、単純な遊びから複雑で多様性に富む遊びに発展していく傾向があり、その可能性に満ちている。赤ん坊のときに角張った立方体で遊ぶことはできない。やはり、ボール遊びが相応しい。働きかければ転がり静止するボール。投げれば飛んだり跳ねたり

するボール。大人と向き合って転がしながらコミュニケーションを促すボール。多くのことを気づかせる第一恩物のボール（球体）である。

そのあとは小さな木箱に入った第三恩物（8つの立方体）以降の出番である。子どもは腰を落ちつけて小さな立方体（積木）をつまんで持ち、並べたり積み上げたりする。単なる白木のゆえに組み方によっては家などの建物や家具になったり、車や電車、船や飛行機など様々な乗り物になったりもする。つまり、子どもの想像性が働けば働くほど、そして、それに応えるように豊富な環境（この場合は恩物）が用意されさえすれば、恩物は多様な形の世界を子どもに見せてくれるのであり、それによって子どもの遊びも多様に豊かに展開するのである。フレーベルはこのような方法で、子どもの想像性、さらには創造性を開発しようとした（図3、4を参照）。



（図3）



（図4）

3 調和・統一に向かう子どもの遊び

しかし、子どもの遊びをよく観察していると、多様化とは逆の遊び方もあることに気づく。つまり、繰り広げられた恩物（玩具）による多様な世界を、小さな木箱の中に戻す行為である。散らかした玩具を片付けることに似ているだろうか。また、恩物に限らなくても、子どもの遊びに限らなくても、たとえば型はめやジグソーパズルはこれにあたるだろう。散らばったピースを正しく元に戻す遊び。拡散と収縮の遊び。これもまた実に面白い。達成できた時の快感は、実際に体験した人でないと言えない。そこに表現されるのは「調和のとれた世界」「統一された世界」と言っているのではないだろうか。子どもは、この対照的な「調和」と「多様性」に向かうどちらの遊びも楽しむことができるのである。両方の世界を行き来しながら、その両者には関係性があること、有機的なつながりがあることを、子どもは言葉ではなく遊びながら感覚的に学んでいるに違いないと私は確信するのである。

4 学生の言動の多様性

さて、形の世界と子どもの世界における調和・統一から多様性（多様な世界）への行き来について見てきた。これは若い学生の生き方に適用できるのだろうか。私の考えを述べて終わりたい。

学生の感性や流行を追う姿、授業とアルバイトの関係づけなど、私が驚かされることは数限

りない。たとえば、「先生、(バイト代で買った)このTシャツ一万円するんです。いいでしょう?」「この(ごつごつした石の)上を歩くんですか? 僕の靴底、革なんだけど……。」「その日の補講は勘弁してください。もう(バイトの)シフトを入れてしまいました。」「もっと早く(補講の日を)言ってくれば大丈夫です。」もう何を優先して学生生活をしているのか理解不能である。しかし、そのような学生たちばかりではもちろんない。率直に大人と何でも話せる学生、異性同士で仲良く語りあう学生、いくつものボランティアやサークルを掛け持ちして活躍する学生等々、若い時の私とは大きく異なってコミュニケーション能力を身につけた学生は少なくない。さらに音感が良く楽譜を正確に読める吹奏楽やオーケストラの経験者、ピアノや歌唱、ジャズなどの音楽的才能の豊かな学生、スポーツやチアリーディング、演劇などのトップレベルの腕前を持つ学生、絵画や彫刻など芸術的センスに秀でた学生なども尚絅学院大学の中には実に多い。理解不能な部分と羨ましくらい優れた部分の両方をもった学生も少なくない。まさに才能や資質・能力、信じがたい性格なども含めて、彼らは多様な側面をもっている。そして、それは形の世界が教えるようにつながっていて、流動しながら自分自身という一人の人格をまさに統一・調和ある姿として形成しようとしているのではないだろうか。だとしたら、多様な学生一人ひとりを私たちは認め、尊重して、人格の完成を目指して努力している彼らを心から応援しなければならないという結論に至るのである。

おそらく昔もいろんな学生がいたに違いない。もっと多種多様な若者がいたに違いない。私の偏見や先入観が強すぎて、許容範囲が狭かったことを今気づかされているのかもしれない。いずれにしても、私の今の学生たちに対する考え方は、もっと砕かれて抜けていかないと、彼らを理解し協同してゆけないと思う今日この頃である。

さいごに

聖書に次のような言葉がある。「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである」(ローマ人への手紙 11:36、口語訳)。

全てのものは神が創造された。だから全て神から出発する。ある意味で神は万物を統一する調和の源である。人間も自然も宇宙も神の力を受けて生まれ、存在し、生活し、表現し、活動する。そのあり様は多様だがみな繋がっている。そして、私たちは自分のため家族や社会のために働き生活するだろう。しかし、究極的には全て神に向かっているのではないだろうか。違う言い方をすれば、私たちが自分や家族・社会のために喜んで充実した生活を送ろうとすることは、神ご自身が望んでおられるということではないだろうか。どんなに多様な生き方があってもいい。むしろ多様な方がいい。多様性は神の素晴らしさを表現しているともいえるからである。自分に与えられた力を少しでも出し切って人生を終わりたいと願うものである。

最後にもう一箇所、聖書の言葉を聞いて終わりたい。「お前の主なる神はお前のただ中におられ／勇士であって勝利を与えられる。主はお前のゆえに喜び楽しみ／愛によってお前を新たにし／お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる」(ゼファニヤ書 3:17)。